

# 子どもの主体的表現を導くための環境構成と指導法の考案

—表現遊び《たのしいみずあそび》の実践をもとに—

白石 朝子・小栗 美砂\*・内田 由美子\*・近藤 悦子\*  
堀 夏紀\*・水野 妃佐子\*・村松 麻衣

## A Study on Environment and Teaching Methods to Bring out the Spontaneous Expression of Children : Based on Practicing Expression Play “Tanoshii Mizuasobi”

Asako SHIRAIISHI, Misa OGURI, Yumiko UCHIDA, Etsuko KONDO,  
Natsuki HORI, Hisako MIZUNO and Mai MURAMATSU

### 1. はじめに

平成29年に告示された新しい『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』では、幼児期の終わりまでに育ちが期待される10の姿が明示された<sup>1)</sup>。幼児教育においては、5領域(「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」)の相互性を理解し、総合的な活動を計画することが求められるのはもちろんであるが、特に、領域「表現」と直接的に関わるものとしては、『豊かな感性と表現』が挙げられるだろう。

幼児期には、心を動かす出来事によって感性を働かせることが大切であり、保育現場では、子どもが様々な音や音楽に触れ、五感をつかって聴く機会をつくりたい。そのためには、保育者が子どもを深く理解し、子ども自らの表現を導く環境構成や指導法について考える必要がある。先行研究では、これまでも様々な環境構成や指導法について示唆が与えられているが<sup>2)</sup>、幼児に対する音楽表現を主眼とした表現遊びの実践をもとにしたものは、未だ不十分であり、研究の可能性があるといえよう。

そこで、本研究では、研究者による幼児を対象とした実践を行い、子どもの豊かな感性や創造性を引き出すための環境構成と指導法について考案することを目的とした。方法は、研究者が幼児を対象とした表現遊びによる研究実践を行い、ビデオ分析、アンケート分析等を行った。研究実践においては、幼児期の特性として「音楽だけを切り離して表現するのではなく、総合的な視点で表現活動を行っていくことがより効果的」<sup>3)</sup>であることを踏まえ、オノマトペや身体表現、また視覚的な効果も取り入れ、総合的なアプローチでの表現活動を目指した。

本論では、子どものありのままの姿をふまえ、音や音楽との関わり、他の子どもや研究実践者との関わりを視点とした緻密な分析を通して、保育現場で生かすことのできる環境構成について検討したい。また、研究実践者の言葉がけや音、モノに対する反応などについて、その詳細を振り返り、保育者に有益な表現の指導法について提案を目指す。

---

\* 非常勤講師

## 2. 実践方法：幼児の表現遊び《たのしいみずあそび》

研究実践では、導入（音遊び）と実践（表現遊び）による構成で、以下のように行った。

- ・対象：5歳児 計5名（女児A・B・C、男児A・B）<sup>4)</sup>
- ・研究実践者：研究者 計5名（進行役1名、ピアノ奏者1名、その他3名）
- ・日時：平成29年6月1日 16時～17時（実践は約40分程度）
- ・場所：土岐市泉西公民館 研修室<sup>5)</sup>

### (1) 実践への導入：音遊び

子どもと研究実践者は一部を除き初対面であったため、両者の距離を縮めることと、子どもが音楽や言葉に合わせて、自然で自由な身体表現が行えることを目的として、10分程度の導入を行った。(図1)

まず、研究実践者が子どもに名前呼び掛けられるように、子どもには手作りのフェルト製名札を付けてもらった。また、研究実践者もそれぞれ簡単な名札を付けた。そして、子どもの緊張を取り除くために、子どもの間に研究実践者全員が混ざって手をつなぎ、輪になって自己紹介をした。次に、研究実践者と子どもが輪になったままで、ピアノ伴奏に合わせて《てをたたきましょう》《ひらいたひらいた》《むすんでひらいて》をそれぞれに振りや動きを付けてうたった。《てをたたきましょう》では、オノマトペの部分（「トントントン」「わっはっは」等）で研究実践者が率先して、積極的に豊かな表現をみせたり、《ひらいたひらいた》では、歌詞を「れんげ」ではなく子どもがよく知っていた「パンジー」の花に替えたりして、子どもが親しみやすく、伸び伸びとうたうことを導いた。最後に、《まわせまわせ》の歌に合わせてお手玉5個を回す遊びを行った。子ども一人が輪の中央で座って鬼になり、他の子どもと研究実践者は歌が止むと好きなポーズで止まり、鬼がお手玉を持っている人を当てる遊びをした。

これらの導入により、子どもと研究実践者とは親近感もち、笑いに包まれた楽しい雰囲気をつくることができたため、実践へ円滑に接続することができた。



図1 《てをたたきましょう》

### (2) 表現遊びに用いる歌：《たのしいみずあそび》

《たのしいみずあそび》は、子どもの想像力を豊かにすることをねらいとして研究者が作成した話にもとづき作詞作曲した歌である。話には、3匹の動物（ウサギ・ハリネズミ・ライオン）が登場し、暑くて日差しが降り注ぐ中、公園に集まって水遊びを楽しむ。

登場する3匹の動物は、大きさの異なるものを選択した。その理由は、大きさや重さの違いによって、動物の歩き方や水に入った時に水しぶきの変化を想像し、その楽しさや面白さが、子どもの表現に繋がることを期待したためである。また、話を歌にした理由は、研究実践者がうたいかけることで、その抑揚や感覚が子どもに伝わり、子どもの主体的な表現を誘導できるのではないかと考えたため



図2 《たのしいみずあそび》楽譜

である。

《たのしみずあそび》の歌（図2）は、9小節の短い曲であるが、7小節目は子どもから出た表現の言葉やオノマトペを入れるため、空白にして作成した。歌詞の構成は、3番まであり、1番では、動物たちが公園に集まる様子をうたい、2番では、動物が楽しく水遊びをする様子をうたう。そして、3番では、動物たちが水遊びをしたときの気持ちを問いかける内容とした。曲は、歌いやすいハ長調、また、ゆったりとした4分の4拍子で、音域は、幼児の声域に合わせて1オクターブ以内とし、言葉に合わせた音の高低を考え、覚えやすいメロディーになることを意識した。

### （3）舞台設定

会場となった研修室の広さは70㎡で、部屋をふたつに間仕切る可動性の壁板を使い、中央に長机を置いた。そして、長机には大きな布をかぶせて、その上にカラーパネルを置き、裏方の様子が見えないように配慮し、子どもの視線が向くような舞台とした。カラーパネル（図3）には、澄み切った空や真っ赤な太陽、緑の生い茂る木などを、紙やフェルトなど様々な質感の素材を用いて立体的に描いた。そして、《たのしみずあそび》に登場する動物と水しぶきは、ペープサートとして制作した。



図3 カラーパネル

これらは、《たのしみずあそび》の話を進捗するための明るく楽しい場面を演出するために設置した。特に、動物が水遊びのために入るプールにはアートバルーンを使用し、同じもので作成した円形プールを子どもの前にも置いたことで、舞台の場面と子どもとが一体となるように工夫をした。また実践には、付属のアップライトピアノ1台も使用した。

### （4）実践方法

《たのしみずあそび》では、進行役とピアノ奏者各1名が、それぞれの場面に応じて子どもの気持ちに合うよう心掛けた声かけやピアノの音を鳴らす試みを行い、他3名の研究実践者が、子どもの反応を見ながら動物のペープサートを動かして次のように進化した。

まず、子どもが一番身近であると考えたウサギを登場させ、その後はハリネズミ、ライオンの順に登場させる。研究実践者は、これらの各動物で《たのしみずあそび》の1番から3番までを歌い、子どもの表現を挿入する7小節目で一旦止める。

そして、進行役が、1番では〈歩く音の表現〉、2番では〈水に入る音の表現〉、3番では〈水遊びをした気持ちの表現〉の問いかけを行う。そして、研究実践者が子どもの表現を受け止めて、8小節目から終わりまでをうたう。次に、子どもにそれぞれなりたいた動物のお面をかぶってもらい、その動物の各音の表現について、進行役が再度問いかけをする。それらを研究実践者がホワイトボードに書き、子どもの表現が全て把握できているかを確認し、子どもと共有する。最後に、それらの表現を7小節目に挿入した《たのしみずあそび》の歌を、子どもと研究実践者が、ウサギ、ハリネズミの順にうたう<sup>6)</sup>。これらの様子を、部屋に置いた2台のビデオとカメラで記録し、研究者が子どもの様子を詳細に分析した。また、終了後には、保護者の



図4 ウサギを見る子どもたち

方へアンケートを行うことで、より客観的な分析を目指した。

### 3. 事例と考察 I : 子どもの想像性と表現

《たのしいみずあそび》の歌を通して、子どものどのような姿が観察できたのか。ここでは、子どものオノマトペによる音表現やその表現方法について事例を挙げながら分析し、子どもの想像性と表現に関して3つの視点から考察を行う。

#### (1) 子どもの体験の有無による想像性と表現の違い：歩く音の音表現から

##### 事例1：歩く音の音表現

ウサギの場合は、子ども全員が即座に「ピョンピョン」と言いながら小さく跳ぶ表現をした。ハリネズミの場合は、男児A・Bが4つ足で歩きだし、その音を聞いた女児Aが「ベタベタ」と表現した。その後、男児が「ポーン」と大きく飛びながら表現したのを見て、皆がだんだんカエルの跳び方に変化し、「ゲロゲロ」と全員が言い出した。ライオンの場合は、男児を中心に様々な表現が見られた。「ガオーガオー」と叫びながら勇ましく歩き、「ドシドシ」「ドッシドッシ」「ドシンドシン」「ドッシーン」と連なるようにオノマトペが表出した。

【考察】ウサギは、子どもにとって身近な動物といえる。また絵本などでも「ピョンピョン」という表現を絵と結び付けて見聞きしているだろう。そのため、全員が絵と想像を瞬時に結び付けて同じ表現を行ったと考えられる。進行役が問いかけても、その他の表現は出されず、子どもには想像と一致した固定表現が既にあると考えられる結果であった。

一方で、子どもはハリネズミの実物を見たり触れたりしたことはなかった。四つ足で歩く身体表現は即座に見られたが、歩く音の問いかけには、ウサギの場合と違って、即答されなかった。女児Aが表現した「ベタベタ」は、手足を床についたことで聞こえた音をとっさに表したと考えられ、想像よりも今の自分に注意が向く音の表現となったと推察する。この表現は、その後子ども全員に共有されるが、それは、実際に子どもそれぞれが四つ足で歩き、その音に耳を傾けた時に「ベタベタ」と聞こえたためであるだろう。

次に男児Bが「ポーン」と言いながら大きく跳んだ時(図5)、その表現は共有されなかった。ここでは、ハリネズミでありながらも男児Bが高く飛んだ姿を受けて「ゲロゲロ」と皆で言い合うようになり、カエルの姿とその鳴き声を共有した表現がみられた。

これらの子どもの反応から、先に挙げた「ベタベタ」は、実体験で得た音の共有であり、受け入れることが容易であったが、「ポーン」という表現は、子どもそれぞれが瞬時に表現と結び付けられる要素がなかったのではないだろうか。そこで子どもは、容易に想像と結びついたカエルを表現し、「ゲロゲロ」というオノマトペの共有に至った。また、「ゲロゲロ」からカエルの跳ぶ身体表現が自然に続いて表現されたといえるだろう。

ライオンは、子どもに馴染みのある動物である。子どもには、ライオンの荒々しさを表現した「ガオーガオー」という強い声や、



図5 ハリネズミの歩く音表現

大きく動きまわる身体表現が見られた。男児2名は女児3名よりもライオンになりきる様子がみられ、想像力を発揮できる楽しさが表現の幅を広げているようであった。

分析を重ねると、音の表現は、子どもが培った経験や体験から引き出されていると考えられる。未経験で想像のみで表れたオノマトペ表現には、子ども自身が納得できない気持ちが見てとれた。子どもには、自分の意図する表現ではないという思いがはっきりとあるのだろう。子どもは、どんな表現でも真似をしているとはいえないことが明らかになった。

## (2) オノマトペと身体表現の相互性：水に入る音の音表現から

### 事例2：水（プール）に入る音の音表現

ウサギの場合は、「ジャポーン」「ジャブン」「ジャバーン」とやや高くかわいらしい声で、ハリネズミの場合は、「ポチョン」「ポトポト」「ポトーン」「ジャブジャブ」「ジャボジャボ」「ポツポツ」をつぶやくような声で表現した。また、男児Bは、「チャポーン」を高音から低音へうたうように表現をした。ライオンの場合は、「ジャボン」「ジャバン」「ジャバーン」と大声で激しく表現し、ライオンの水遊びをする際は「ババババー」と表現した。

【考察】各動物の水に入る音の表現は、それぞれに変化のある表現がみられた。ウサギとライオンは、オノマトペとしては同じ表現であるが、それを表現する声の大きさやそれに伴った身体表現の違いは、はっきりと観察された。子どもは、ウサギよりハリネズミの方が小さいと感じていると分かってオノマトペを表現したといえる。また、ハリネズミの場合は、男児Bが「チャポーン」をうたうように表現をしたことは、オノマトペが音楽と結びついた音楽的表現であった。

子どもは、動物の大きさや重さを想像し、その違いを考えて表現していたのであろう。その違いは、音だけでなく身体表現にも表れており、両者は強く関連しているといえる。オノマトペの表現は、それに付随した身体表現が伴っていることが多々みられた。オノマトペが身体表現を生み出す一方で、身体表現がオノマトペを導くという相互作用が、子どもの表現に広がりを持たせたと考えられる。そのため、まだ語彙力を多く持たない子どもには、オノマトペ表現と身体表現が互いを補う働きをし、表現が生まれるといえるだろう。

## (3) 表現における子どもの自主性：気持ちの音の表現から

### 事例3：水遊びをした時の気持ちの音表現

進行役が「ライオンさん、プールに入ってどんな気持ちかな？」と問いかけると、それまで楽しくライオンになりきって歩く音や水に入る音を表現していた男児Bが、「全然楽しくない」と答えた。それに続いてその子ども以上に勇ましくライオンの様子を身体で表現していた男児Aが、「水なんか嫌いだー」「出よ出よプール」と言いながらプールを出る行動をした。それを受けて、女児Bは「ハリネズミも嫌いだー」「全部嫌いだー」と発した。

【考察】事例1と2で挙げたように、子どもは、ライオンを様々なオノマトペや身体によって表現していた。しかし、進行役が水遊びをした時の気持ちの音について問いかけると、子どもからは、それまでの表現を打ち消したかのような言葉や表現があふれ出た。進行役は、表現遊びが楽しくないという意味に捉え、「そうか、水が嫌いなんだね」と、子どもの気持ちを汲み

つつも、これ以上の音表現は出にくいだろうと判断し、次の転換を進めた。

しかし、子どもの様子について分析を重ねると、この表現は、ライオンになりきっていたことによるものであったことが推測できる。女児3名よりもライオンになりきっていた男児A・Bは、ウサギやハリネズミの場面でも意欲的な表現を行ってきており、《たのしみずあそび》にしっかり入り込んでいた。そして、ライオンになって「出よ出よプール」と言い、プールから離れる姿でも、男児は、4つ足でライオンを表現していた。これらのことから、男児Aは自分がライオンになりきったからこそ、ライオンの気持ちを想像し、このような表現をしたのであろう。この場面では、気持ちの音表現を引き出すことはできなかったが、子どもの真の主体的表現がみられたともいえるのではないだろうか。

また、男児Bは、表現遊びのはじめに問いかけた「どんな動物が好き？」の返答に、「ライオン」と答えている。男児Bの母親によるアンケート解答にも、「普段はライオンが好きなのに、最後になりたい動物を選んだ時に選択肢にない象を選んだことを（母親が）不思議に思っ尋ねたところ、（男児Bは）象が大きくて強いからと答えた」と書かれていた。男児Bは、なりたい動物を選ぶ際にも、つぶやくように「象」と答えており、ライオンが水に入る様子では強さを感じられないと考えて、選択肢にないと分かった上で「象になりたい」と答えたのだろう。

#### 4. 事例と考察Ⅱ：子どもの表現を育む環境構成の工夫

実践では、これまで述べてきたように、研究者が子どもの表現を引き出すために様々なしなかけを準備した。また、研究実践者は、子ども5名と積極的にかかわり表現遊びをした。ここでは、これらのモノや人という環境構成のあり方や援助の工夫が、子どもの表現の育みにどのように関わったかについて、事例を挙げながら分析し考察を行う。

##### (1) 子どもの好奇心を踏まえた環境構成

###### 事例4：見えるモノ（ペープサートの動物と子どもの姿）

ウサギの歩く音の表現を引き出す場面では、当初子どもは舞台裏に気がそれていたが、ウサギのペープサートを子どもたちの前に出して動かすと、ウサギの真似をして跳ぶことが始まった。また、ハリネズミの水に入る音を引き出す場面では、男児Tが「ポチョン」と表現した後、舞台上のハリネズミに「ハリネズミくん」と声をかけた。

【考察】子どもがウサギの真似をして跳んだのは、子どもがペープサートに誘導され、同じ表現を共有する仲間意識が働いたからだと考えられる。男児Tが「ハリネズミくん」と声をかける場面では、ペープサートが子どもを想像の世界に繋げる役割をし、話の中の動物を実感として感じさせる効果があったといえるだろう。ペープサートの動物は、子どもの注意を引き付けるとともに、想像の世界へ入りやすくし、気持ちを実践へ向けさせる効果があったといえるのではないだろうか。

###### 事例5：見えないモノ（水しぶきのからくりと子どもの姿）

ウサギの水遊びの音表現を引き出す場面では、カラーパネルのプールから水しぶきのペー

プサートを出すと、男児Bが、「でー」と言ってプールの中をのぞいた。すると、子ども全員がそれに呼応するかのようにならなると夢中になって中をのぞき始めた。

【考察】研究実践者は、水に入る音表現が子どもから豊かに引き出せるようにと考え、動物の大きさに合わせた水しぶきのペープサートを準備した。机にシートをかぶせ、水しぶきが出るからくりが見えないような工夫をしたが、子どもは、それがどこから出てくるのかを気にしだし、表現の育みが一旦中断せざるを得ない状況となった。また、その際に、子どもは舞台裏でペープサートを動かす研究実践者を目にして話しかけた。このことは、子どもが場に溶け込み、研究実践者とも自由に話せる和やかな雰囲気を表しているが、子どもの好奇心が膨らみ、視覚的なモノに反応する行動や発言が規制なく出たのであろう。

事例4と事例5の考察から、環境構成は、意図的に子どもが見えないようにして行う場合には、幼児の強い好奇心を想定すべきだといえる。もし、表現を育むための環境構成として、見せない設定を効果的に試みるならば、「見えそうな状況」にはならない「見えない状況」を徹底することが大切だと考える。

## (2) 子どもの五感を育む環境構成

事例6：視覚と嗅覚と触覚（動物のお面）

ライオンの音表現を試みようとして、研究実践者が子どもにお面を配った。受け取った女児Bが「お面、横になっちゃう、お面、クレヨンくさいんだけど」と言った。すると、その他の子どもも口々に「横になっちゃう」「くさいくさい」と言った。

【考察】研究者は、子どもが動物になりきる表現をより引き出す効果を期待して、各動物のお面を準備した。子どもは、お面をかぶると途端に動物の動きをしたり、実践の最後になりたい動物について尋ねられた際には、並んでいるウサギ、ハリネズミ、ライオンのお面を見て考える様子が見られたりしたため、「動物になる」といった想像の世界への繋ぎに効果はあったであろう。その一方で表現遊びの視点で考えれば、子どもが、お面のはめ心地やクレヨンの匂いに気を奪われ、短時間ではあったが、気持ちをそらすものとなったとも受け取れる。お面は、子どもに場面転換を明確に伝え、どの動物になるかを把握させる役目となったが、5歳児であれば想像で行うことも可能であろう。

事例4：視覚と聴覚（アートバルーンのプール）

ウサギの水に入る音の表現に取り組んでいる際に、アートバルーンで制作したプールの一部が割れた。その際に大きな音がしたため、子どもは耳をふさいだり、風船を触ったりして遊び始めた。

【考察】アートバルーンのプールは、これまで述べたように、研究者がカラーパネルと子どもの前に置いた円形プールを連動させ、舞台と子どもが一体となるように用意した。プールを見た子どもは、色鮮やかで大きなモノの登場に、気持ちを高ぶらせて歓声をあげた。実際の水遊びのように動作をして様々なオノマトペを生かして表現したことは前述の通りであり、プールは、子どもの表現に対する誘導効果があったといえるだろう。一方で、プールが割れてしまっ

た場面では、割れた音が子どもに不安をもたせ、耳をふさぐ時間が続き、気をそらせてしまうものにもなった。子どもは、表現のことよりも風船が割れた事実が気持ちが向いてしまい、その後、進行役は子どもを現実的な世界から表現活動に取り戻す必要があった。

以上のように、事例3と事例4は、子どもの感覚の鋭さをよく表している場面であり、環境構成では、子どもの五感に対する配慮を重要視すべきであるといえる。研究者が色や形といった視覚的な視点で捉えていたものは、実際に子どもの環境に置かれると、音や触り心地、匂いなど五感で感じられるものとなっていた。



図6 プールが割れた直後

## 5. 事例と考察Ⅲ：子ども同士の関わりによる表現の広がりと援助の工夫

《たのしいみずあそび》では、子どもが他の子どもの表現に同調しながら自分の表現を重ねるように発言したり動いたりして、子ども同士で表現の幅を少しずつ広げていく様子がみられた。ここでは、子ども同士の関わりによって変化したオノマトペ表現や身体表現について事例をもとに分析し、子どもの関わりによる表現の広がり、それらを引き出す援助の工夫について考察する。

### (1) オノマトペ表現の事例をもとに

子ども同士の関わりによるオノマトペ表現の変化は、表1の通りである。それぞれの表現が、少しずつ変化し、新しい表現になっていることがわかる。これらは、子どもが自分で感じたものだけでなく、他の子どもの表現を知り、それに対して同感したり、違いを感じたりして生み出されたものであろう。それらの経験が表現の楽しさを倍増させ、子どもの表現を広げたといえる。

表1 オノマトペ表現の事例

場面	子どもの表現の変化
ウサギの水に入る音	女児C：ジャポーン → 男児B：ジャブン → 男児A：ジャパーン
ハリネズミの気持ちの音	男児B：ジャブジャブ、ポトポト → 男児A：ポトーン → 男児B：ジャボジャボ、ポツポツ
ライオンの水に入る音	女児B：ドシシ → 女児C：ドシンドシン → 男児B：ドッシーン

しかし、中には、表現を持っているが、積極的に発することが難しい子どももいた。例えば、表1で示したオノマトペ表現をした女児Cは、一見、率先して表現をしていたように捉えられるが、進行役が個人的に「Cちゃんどうかな？」と問いかけたことで、初めて小声で表現してくれた。このように、子ども一人ひとりに目を向けて、子どもがもつ主体的表現を引き出すことが大切であり、それぞれに合った援助を工夫する必要があるだろう。

また、表現の際には進行役が皆で小さく輪になるよう誘導し、一人の子どもと手をつなぐと、自然と全員が手をつなぎ輪になった。輪になることで、子どもの関心が内に向く効果が見られ、進行役の言葉掛けや、友達の発言に耳を傾けさせる援助となった。進行役は、子どもが発したオノマトペや発言を受け、「○○なんだね」「○○というんだ」と返答し、子どもの表現に共感



する姿勢に徹した。それにより、子どもはさらに違う表現をするなど、子どもが自由に表現を発することができたのだろう。

## (2) 身体表現の事例をもとに

子ども同士の関わりによる身体表現の広がりや、表2の通りである。これらの場面では、研究実践者が意図的に働きかけたのではなく、ある一人の子どもが実践を終えても動物になりきって表現していた動きに、他の子どもが気づき共感したために、その表現が広がったといえる。

表2 身体表現の事例

場面	子どもの表現の波及
ウサギの音表現の終了後	お面を外した後、女兒Cが、ウサギの身体表現をしながら部屋の中央に戻って行った。それを見て女兒Aが追いかけるように同じ動きをした。
ハリネズミの音表現の終了後	ハリネズミの歩く姿を4つ足で表現する男児Aにつられて同じ動きをした。
ライオンの音表現の終了後	お面を外す時、はじめにお面を置く男児Aが、ライオンの「水なんか嫌いだ」との思いを残した様子そのまま、お面をふてぶてしく置く姿を見て、子ども全員が続けて同じ行動を行なった。

身体表現には、子ども全員が思い思いの動きを自由に行い、関わり合いながら表現を共有したり、皆で感じ合い考えたりするといった表現の育みが行えたように感じた。例えば、女兒Cは、積極的なオノマトペの表現が出なかったが、身体表現は率先して行う姿が多くみられた。ウサギの場面では、ピアノの音に反応し、小さく小刻みに跳ぶ様子が見られ、ハリネズミの場面では、のちに全員がカエルになって高く跳ぶ身体表現を一番にみせた。女兒Cにとっては、周りを気にすることなく、同時に自由に表現できる場が必要だったのかもしれない。今回の実践から、個々の表現を引き出す難しさを感じるとともに、環境構成と指導側の言葉掛けが、流れをいかようにもできると痛感した。

## 6. まとめ

本論を通して、子どもの様々な表現について考察した。子どもの表現を引き出すためには、子ども自身の感性によって子どもなりの表現を導く必要があり、子どもが培った経験や体験が大きく関わるということが明らかになった。

表現遊びの環境構成では、指導者(=保育者)がモノの役割を見極め、モノの必要性を吟味し、子どもの視点を第一に考えて準備する必要があることを述べた。モノを多く用意すれば、子どもの表現が豊かに引き出せるというわけではなく、「あったほうが想像に効果的なモノ」と「想像させたほうが効果的なモノ」とを、子どもの発達をよく理解した上で準備すべきである。

また、指導者の果たす役割は大変重要であるといえる。本論で述べたように、今回の実践では、進行が思わぬところで変わったり、表現が出るまで進行を待ったりするなど、進行役の臨機応変な対応が重要となった。その中で「子どもの楽しさやわくわく感を失くさないように場を維持すること」「指導者側も楽しむこと」は大変難しいが必須である。これらをバランス良く保つことが、子どもの表現を育むためには大切であろう。

指導者の言葉掛けや援助においても、子どもの視点をもつことが大切である。指導者は、表現活動において、ある程度の枠組みを設定して行うだろう。その際に、指導者は設定が指導者

側の視点によって子どもの表現に狭い枠を設けていないかについて、常に考える必要がある。特に活動の最中では、指導者が進行を考えるあまり主観的になりやすい。指導者は、自分自身も含めた設定を客観的に捉え、子どもの表現活動に目を向けることが大切ではないだろうか。

子ども主体の表現は、設定した実践の道筋から外れた所にこそ表れる。その子どもの視点による表現に寄り添うことが、更なる子どもの主体的表現を引き出し、互いの楽しさに繋がるといえる。今後は、これらを踏まえ、個々の表現を引き出す環境構成や言葉掛けを重視しながら、子どもの主体的表現を導く援助や工夫について、さらに検討していきたい。

### 謝辞

本研究にあたり、表現遊びの実践にご協力くださった子どもと保護者の皆様に、心よりお礼申し上げます。

資料：実践記録

表3 《たのしみずあそび》実践記録（平成29年6月1日）：前半

時間	研究実践者の言葉掛け	子どもの反応・表現	環境設定と子どもの様子	ピアノの音
00'00"	今日起きたら雨降ってた人～？(手を挙げてもら)		子どもたちが舞台前に一列に座っている	
	どんな雨だった？	男児A：細かく降った。 ザーツ(片手を上から下に下げながら強い口調で発言) 女児B：シャワーみたい 女児A：(女児Bにつられて)シャワーみたい		
01'11"	あの向こうの山に何かいるかな？ ウッキッキと来るかな？	男児B：あつわかった、サル。 女児A：プタ 女児C：クマ		
01'29"	みんなどんな動物が好き？	全員：ウサギ～女児B：ウサギとリス 男児A：ネコ		
01'45"	あの向こうの山からお友達見るといいね。呼んでみる？		背景ボードからウサギが顔を出す(顔→胴体の順)	ハ・ホ・トの和音を弾く
	あ、誰かいた？	全員：ウサギ～(一斉に)		
	あれは何？	全員：ハリネズミ～	背景ボードからハリネズミを出す	トトのオクターブでトレモロを弾く
		全員一斉に：ライオン～(大きな声) 男児B：ライオンが好きだった	背景ボードからライオンも出る	譜例①を交互に弾く 譜例① 
02'43"	動物さんたちみんなで、歌をうたってくれるんだって。どんな歌をうたってくれるか聞いていてね。 研究者全員で《たのしみずあそび》をうたう		動物のペープサートをゆらしながらうたう	
04'25"	動物さんたち何して遊ぶって言うていた？	女児B：みずあそび 全員：みずあそび～		
04'43"	暑いから、この公園でプールに入るって。 幼稚園はもうプール始まる？	男児B：まだ～、これから(発言が飛び交う) 女児B：プール		
04'56"	あそこにあるのはね・・・	女児A：みんなって誰？		
05'00"	ここのお話の中にみんなが入っていくよ			
05'08"	みんなウサギさん好きって言うてたね。 まずみんな、ウサギさんになろう。	全員：うん		
	ウサギさんになーれ、ウサギさんになーれ。(呪文をかける仕草をしながら言う)		お面を出す	
	お面かぶったらここにきてね！		お面をかぶる	
06'02"	みんな、ウサギさんになったよ。 あの山に行こう。			トウサギのダンス
	ウサギさんになって歩くよ。 ウサギさん、どうやって跳ぶの？	全員：(両足を揃えて小さく跳ぶ) 男児A：(誰かを見て)それカエルじゃない？		ニ・嬰へ・イの和音弾く
	女児Cちゃんやってみて。 かわいいねー	女児C：ビヨンビヨンと跳んでみせる 女児A：両手を挙げて耳を表してビヨンビヨンと跳ぶ	舞台中に気をとられるがウサギのボードを前にだして動かすと誘われて皆が気をむけた。	
08'22"		男児A：でかい皆ビヨンビヨン跳んで喜ぶ) 女児A：ハートみたい 男児A：わーやったー	プール出す	
	お友達のウサギさんがプールに入るから見て。どんな風に入るのかな？どんな音がするのかな？			
	せーの！		ウサギのペープサートをプールに入れる 水しぶきを出す	
	どんな音がする？	女児B：ジャポーン 男児A：ジャポン(跳びながら) 男児B：ジャバーン		「プールを作った風船がわれる」と耳をふさいで警戒したず
08'50"	ウサギさんプールに入るよ プールに入る時、みんな音を口で言ってみせーの！ジャポーンで言うの	(それぞれ大きな声で) ジャポーン、ジャバーン、ジャポーン		譜例②の和音を弾く 譜例② 
09'53"	みんな水遊びしてごらん チャブチャブチャブ	(女児C、女児A、以外で) ジャバジャバ、ジャー (手をバタバタさせ、みんなで水を掛け合うそぶりをした)	水しぶきを見て皆、舞台の中を覗きたず	いろいろな2音を繰り返し弾く
10'28"	もう一回入るよ、どんな音がする？	(1回目と同じ答えだったが楽しさは半減)		譜例③の和音を言葉に合わせて弾く 譜例③ 
10'48"	どんな気持ちかな、うさぎさんどんな気持ちになったかな？Bちゃんどう？ ピアノ奏者：まだみんなお話の中にいるよ	女児A男児B;女児C;女児B;たのしかった(他の子からは反応なし) 女児A:お話の中って？	プールで遊びだす プール片付ける	
11'48"	ウサギさん、おうちに帰るよ	小さく跳びながら皆が帰った ウサギでいる様子が続いた		子どもたちのジャンプに合わせて弾く 譜例④ 
		女児B：ビヨンビヨン跳ぶ 女児A：女児Bを見た後、両手をあげ、その手を耳のようにして跳ぶ 男児B：スキップ		《たのしみずあそび》をスタッカートで弾く

表4 《たのしいみずあそび》実践記録 (平成29年6月1日): 後半

時間	研究実践者の言葉掛け	子どもの反応・表現	環境設定と子どもの様子	ピアノの音
13'07"	<ハリネズミ> ハリネズミさん、どうやって歩くの?どんな音がするかな?どんな風に歩くの?	全員4つ足で歩き出す 女児A: ベタベタ(床につく手足の音) 男児A: ホイーン(大きく跳びながら言う)		
13'34"	ピアノ奏者: あの奥のハリネズミさん、どんな風に歩いてる?	男児Bを見て、皆がカエルになりだす。女児A、女児C、ゲロゲロ		
14'00"	向こうのハリネズミさんプールに入るって。入るよー、プールに入るよー。 <せーの、入ったー。> どんな音がした? そうか、チャポーンてきこえたか..	全員: ゲロゲロ 男児A: チクチクこうけき (ペープサートに向かって言う) 男児B: チャポーン 男児A: ホチャポン、ハリネズミ君(と声をかけた)女児A: なんぞ寝転がっているの?	舞台裏を気にする。皆で覗く。寝転がっている先生を気にする。	高音で短い音と長い音を混ぜて弾く
14'30"	(手をつなぎ輪になって) みんなもプールに入ってみよう、手をつないでー、どんな音がするかな、いくよー、入るって一緒に。せーの。			ロ・ニ・トの和音を弾く
15'31"	(座って小声で話しかける) みんなハリネズミさんさわったことないやん..	女児B、男児B: うん		
15'43"	プールに入ったらどんな気持ちになったかな?	男児B: ジャブジャブ(皆笑う) ポトポト 男児A: ポトーン		色々な音をユニゾン(左手と右手が同じ音)で弾く
16'07"	音にするとどんな音かな?	男児B: ジャブジャブ ポトポト		
16'07"	ハリネズミさん、おうちに帰るよー お面外して <ライオン>	全員: エー(残念そう)		《たのしい水遊び》を高音で軽やかに弾く
16'30"	大きいね	こわーい(ライオン) ガオー(大声)	お面横になっちゃう	《たのしいみずあそび》の歌を低音で重々しく弾く。和音を二分音符で鳴らす。
17'48"	ゴシゴシ? 女児Bちゃんは?	女児A: ドシドシ! 女児B: ドシンドシ	お面のにおいを気にする ピアノの音を気にする	譜例⑤を弾く
18'23"	女児Aちゃんは? ライオンさん、プールに入りたいて。せーの。	男児A: ドッシーン、今度ほでかいよ 男児B: ババババババ (進行役に向けて手をバタバタさせる) 女児B、女児C: ジャポーン、ジャパン 男児A: ジャバーン(激しく言う)	手をつなぐ	低音で和音を重々しく弾く
19'01"	みんな、ライオンさんプールに入ってどんな気持ちかな?	男児B: 全然楽しくない。 男児A: 水なんか嫌いだしー。出よ、出よプール 女児A: ハリネズミも嫌いだしー、全部きらしいだー		
20'20"	<まとめ> 最後にどのこになりたいた? じゃあね、なりたいたいののお面持ってきて。 男児Bくん、お面なしでやろうか	男児A: ハリネズミ 女児A: ウサギ 男児B: ソウ(お面の方を向く) 男児B: (少し考えてから)ハリネズミにするー。		
21'16"	なれた? みんなここに座って。 ライオンさんは水が嫌いだからからがらなかつた? 女児Bちゃんウサギはどんな風にして歩くの? 女児Aちゃんウサギはどんな風にして歩くの?	男児A: うん 男児B: ピョン 男児A: チョッピー 男児A: チャッピー 歌を聴いたず 女児A: っ!いつものえがおでー 男児B: ピアノの音?		
22'06"	ピアノの音ってどんな音だった?	女児A: 私、ピアノの音って言ってない。ベタベタって言ったよ。(足をバタバタさせながら言う) 男児B: チャポーン 男児A: 女児Aの様子を見て同じ仕事を。		
22'40"	女児Bちゃんウサギはピョンピョンだったよね。 ピョンピョンじゃないウサギさんいる?	進行役: ホワイトボードに表現を書く。 全員: ホワイトボードを見る。		
23'16"	男児Aくんたちハリネズミさんどんな音がするの? 女児A: いないいない 男児A: ベタベタ 女児A: ベタベタ 男児B: ベタベタ これハリネズミさんね。 ウサギさんプールに入る時どんな音して入った? みんなチャポーン?	男児A: うん 男児B: ピョン 男児A: チョッピー 男児A: チャッピー 歌を聴いたず 女児A: っ!いつものえがおでー 男児B: ピアノの音? 男児B: ちがう 男児A: チャポーン?(高音から低音に発音) トポーン(力強く)ベチャベチャ 男児A: ベチャベチャってなにー		
24'00"	ハリネズミさんどんな風な音して入ったの?	ジャポーン		
24'30"	ウサギさんと一緒に? プールに入ってどんな気持ちかな、それってどんな音かな。	男児A: 男児B: うん 女児A: ..ウサギって重いかなー 女児B: たのしかった 女児A: ぬれるのがすきだった 女児B: たのしくてもう1回やりたかった 男児B: トポーン 女児A: ベチャベチャじゃないの		
	<歌を完成させる> 「せーの!」と声掛けし、場面ごとに表現されたオノマトペを入れ、うたわせた		歌詞を書いた紙を見せながら、1〜2番まで7小節目にオノマトペを入れてうたう。(ライオンと気持ちの音なし)	《たのしい水遊び》をオノマトペも入れて弾く 譜例⑥

## 脚注

- 1) 『10の姿』は、以下の通りである。「1. 健康な心と体」「2. 自立心」「3. 協同性」「4. 道徳性・規範意識の芽生え」「5. 社会生活との関わり」「6. 思考力の芽生え」「7. 自然との関わり・生命尊重」「8. 数量・図形、文字等への関心・感覚」「9. 言葉による伝え合い」「10. 豊かな感性と表現」
- 2) 岡本：2017、矢部：2012などが挙げられる。
- 3) 石井：2009、16ページ。
- 4) 5歳児5名は、同じ園に通った経験のある子どもである。5歳児は、「保育所保育指針の発達過程」にあるように、仲間とともに活発に遊び、言葉により共通のイメージを持って遊んだり、目的に向かって集団で行動する事が増えるたりするようになる。そのため、限られた時間内で幼児の豊かな表現を引き出すためには、幼児たちが仲間を意識できる環境が始めからあった方がよいと考えた。
- 5) 実践場所は、子どもが何度か親子で訪れたことがある公民館を使用した。
- 6) 計画では、ライオンを行う予定であったが、実際には行わなかった。その理由として2つ挙げられる。1つは、実践時の「気持ちの音表現」の場面で、ライオンの水遊びについてあがった幼児の発言「全然楽しくない」「水なんか嫌い」から幼児全体の考えに波及し、ライオンが水に入ることへの戸惑いが見られたためである。2つは、まとめで行った「なりたい動物」にライオンを選ぶ幼児がいなかったため、表現を意欲的にしないのではないかと考え、流れを壊さないようにと考えたからである。この子どもたちの様子については、重要な表現の場面として「3（3）表現における子どもの自主性：気持ちの音の表現から」に記す。

## 主要参考文献

- 石井玲子編著 2009『実践しながら学ぶ子どもの音楽表現』大阪：保育出版社。
- 岡本美和 2017「保育士・幼稚園教諭養成課程における学生と幼児の感性を共に育む音楽環境構成の一考察（第1報）幼児のことばを表現する」『小田原短期大学研究紀要』第47号：257-263。
- 河合優子 2017「新しい学習指導要領①論説1 幼稚園教育要領改訂のポイント」『初等教育資料』5月号、No.953：2-13。
- 白石朝子 2016「乳幼児向け演奏会のプログラムに対する一考察—『おやこ音楽会』の開催をもとに」『名古屋女子大学紀要』第62号：283-293。
- . 2017「領域『表現』における幼児の音楽表現を豊かにする指導法の検討—研究コンサート（全3回）の実践から—」『名古屋女子大学紀要』第63号：322-333。
- 矢部朋子 2012「環境構成の工夫にみる音楽的表現活動の展開過程：4歳児におけるシャボン玉の実践を通して」『学校音楽教育研究』第16巻、日本学校音楽教育実践学会：49-56。

